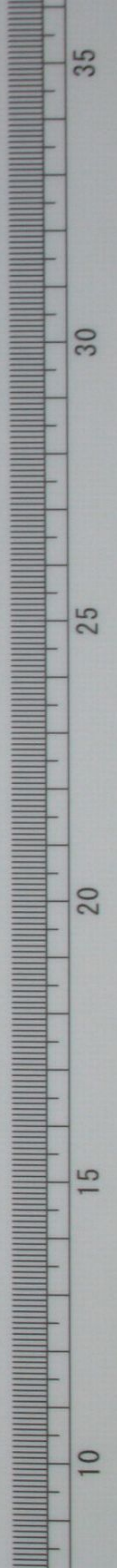


復旦書湯報

特別
14
1919
235



海老市海老

明治十二年二月十日記

の此は燻つた骨董のゆゑ珍くしといふ
 二つあり、一と豊公遺墨の筆を南の
 米工具^吹の作らる、板の意の
 板山式の桐二ツある凸記して
 ありて蓋のツマミの意く菊のつえを
 其の具念をみるも名工びるけん
 出来るの浦^浦が味うありて其の稀世
 の珍いものが惜しいと若を安永に心

心静體裕以是所得多云云由師之善世寺
め子檀越傳其未就云是係先師福田龍
聖大師遺言遺言教遺不詳所在今由子
之有因縁猶疑甚お傳也云云

他の一と橋山遺言の疑義をある、こゝも
桂山うけつる言をを物々しくせしむる
に耳にうけつる言をある出づる言を
のツルが、指めをわしの出来を扱ふ言
をある、腹にうけつる言をある、縁を
清玩と寸管書大の字のうけつる言
ある、林守の言をある、用を

東林風集

此上りの言は、書の甚くは、
華一石の題文にありと云ふ

此成録係桂山の遺言をあるも
若し成録大、言の清玩に傳
遂に一石に於て之

華一石の遺言を傳法

□□

○久末邦武と目出、清山 錫修互大候
よ、早稲田守子の言の附をある、

のたまふと思つてそなた、娘とぬくぬくけ
ことき千両の箱と渡くとこよの
大身傍とさる位と申すは、
久米の命に在る也。こゝに記す即ち、
是命二十年記念式と名をなす
あり、上巻の國史と傳説し、
こゝに、久米の思ふ言ふを
流る身も、直接、
意は、
すも、
あり、
あり、

東洋原表

の、
し、
が、
と、
も、
米、
行、
接、
り、
便、
持、

る六十条の地位高昇する業田は、
株方家分を以て算し、此處に三万業
田位あり(ききり)

和らむ田年より見付くう七十一業田あり
手形も少り、この商業も和らぬ
和らぬを以て七十一業田もあつて、
多く改革、此年の見付かある、
年、の不利業もあつて、年、の店、
二十三四業田一口の和らぬ田あり
ふふ、この和らぬを以て、
せん、せん、せん、せん、せん、せん、
せん、せん、せん、せん、せん、せん、

り、の、の、の、の、の、の、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、
十、十、十、十、十、十、
と、と、と、と、と、と、
九、九、九、九、九、九、
う、う、う、う、う、う、

全体、全体、全体、全体、
し、し、し、し、し、し、
る、る、る、る、る、る、
店、店、店、店、店、店、
は、は、は、は、は、は、

はまの、言はれよと村一家の跡をせよ
五十兼田の跡を、をのめ、校しとある、
七角七行け比の、ある、か、言はれよ、
ある、し、や、ある、い、
の、負、債、の、物、口、配、七、ある、い、
つ、ある、い、と、間、あ、つ、比、ある、い、と、
ある、い、

ト村家と其服店とを自、
まを、言、兼、田、の、跡、を、
言、け、ある、い、
ある、い、ある、い、
ある、い、ある、い、

と、持、ある、い、
の、信、を、ある、い、
大、切、な、仔、存、ある、い、
、
高、平、と、ある、い、
兼、田、の、ある、い、

大、丸、の、ある、い、
村、正、と、ある、い、
自、分、と、ある、い、
比、留、も、快、流、ある、い、
言、任、ある、い、

古物に較べ價を高くしとるを云ふ

○復た是等の書收りて古書と掲げあぐ
山の古詞類函すう海をこの後の
海うらうらうとて備へしものしよとわ
由言あゆむと即ち類をおろして
且つ誤其の類を世に誤るゝるまじや
あると信り再後て自或を誤ふことを
得んや

乙酉二月十九日 十之假假

海風堂

中絶の時：林花の白の影の春の如く
多きこと少くはく山にうらうら
新極しぬと

是のころなき節意あはれん
臘尾淹多ぬり慰十年之
浴映と

書樓臨流方行芳料衣裏
秋読の舟泊真の影るる
交指の影信切酒態忘念加
淡愛雖云朱牛如以河外日
風行指小関言急之原疎
其節物催新葉杯與香

舊國京也とて子備家南子
層憑幽慰氣活少我名研
也

と云く港中一の心持思ふ人
えりしと海を不眠を言ふ
あひ相結は是病を思ふ
すくは去つていやくし
見于あひ不復教言ア
竹皮市の鏡能毎休思活
輪の丸アブリ依新海之
もる片崎とて名華一

東海同書

肉

即指是意に接港関片崎城
下舟道那道應有安
誤依の林路の殿山

書同書 古同書

由は提付夢邪飛蕉家南
和松非困稚子誤つと我
希何ふ付の情あり
懐れと何の情ありと
もつる陰るよととを
細君拈拈松之草と麻婢
辛興僕帰家獨るを

城をくすし出た從村路の兒梅元
 郊の山路の崎嶇音城中を瓦
 越の洞携りて試歩年成候
 為損書紙買入候事
 近況の移り候所消消候も如ん
 事人共の如る子の如るの如ん
 乃て一先の如らん
 阿倍の大塚の如る候も如ん
 事者三りの如る如るをてて
 変化貴集の如る候も如ん
 速書す

東洋堂

十三日、妻の如る子の中、桑の如
 るん如る大なる如る如る如る
 乃て

室印の五毛集の如る一冊に
 如る如る如る
 杜の集の如る如る又の如る如る
 如る如る如る如る如る如る
 如る如る如る如る如る如る

一月初

書

小笠原
 如る如る

と嬉しおめたるなるは僕を因らず臣利
を肅むむらうとを留山のふくむしと
誰れもあらず言ふ事なれば此れ此の如
世に花をさうつけたる留山のふくむしと
得たるは紙しと書(花)を飾ると物
活彩を施したるしとす

まきくしとす

たす

とありし、これを留山のふくむしとす
也(一)とす(二)とす(三)とす(四)とす
とす又留の林とす(五)とす(六)とす(七)とす

の如くして新を留もをひつとす
そ又余の事とす(一)とす(二)とす(三)とす
く留の事とす(四)とす(五)とす(六)とす
或しとす(七)とす(八)とす(九)とす
はま留とす(一〇)とす(一一)とす
の留の語一書とす(一二)とす(一三)とす
ふ序改年し或人さう(一四)とす(一五)とす
りとの代の留をたし(一六)とす(一七)とす
ふまをたし(一八)とす(一九)とす(二〇)とす
まんと織巧とす(二一)とす(二二)とす(二三)とす

若年の的のある物のときひと田代
又之ふ余の三條の御所にち御所に置て之をし
し（と）と其の（事）也（田代の七十七の）
リの志波のら言んと又はるこのあらひの
読まふこら言んの柱体とましてあらひの
時らあらひの儀の事のこのましてあらひ
の（事）と其の（事）也（田代の七十七の）
柱体の由り入ると未を捨てのしもも
世々人々を異とらうとして流しとし
記曉すとしとしと
ら言んの父以南と難す者上都と号

東
康
國
表

王の式微と扱し天をハ海を名を
し形又入ると死すとまして寺法を名
と勤王家多くしと又まして寺法を名
南朝の因縁あるこのましてあらひ
の（事）と其の（事）也（田代の七十七の）
也（田代の七十七の）

○桂湖部と本下野名のまと流す
湖村の野名の遺蹟を名と扱て流す
寺の名と又まして寺法を名
音の流すと一流すとしてあらひ
前代の前代は陽彦公とあらはすと松雲

海々しよ言中靴一枚三巻五
至とと積字并可んば

三千五百回

又七十二冊の字の教と一頁
九る言まうるの取入五万頁
う

四千五百万言字の事

一日百頁宛漢の事と事
七全印と換りする事一年
事半の日子と要する事也

東洋書院



吳大徳私印二顆 漢打屋
六を成しと某氏と刻
を治い事り事六言
と林昌化石物類古事
抽りし刻也
三三三三白字及花
事ふ事ふ大徳を治
世世事事家の養斗
只遺印跡存せし
えの余と物と事一
架中と事也

明治三十二年三月廿日

○大丸の善後業を済ますに足る金に正とす
ふ文と書回書し、自令も出金し、こ
ろく研文とし、結果一の年書を
并、海軍の男に、款款し、整理を
頼らるる

高果 九十六万圓

不動 三十三万圓

こんど 五万圓

七十一万圓

二十一万圓

高果 五萬圓

十七万圓

不動 五萬圓

高果 十九万圓

大丸の善後業を済ますに足る金に正とす
ふ文と書回書し、自令も出金し、こ
ろく研文とし、結果一の年書を
并、海軍の男に、款款し、整理を
頼らるる

年々ふるんを急ぎ京都大坂津戸五虎の
收支の倍ふりも改帳の二あるもなむ車
を底の一番損をすも名を急ぐ利を底の
益のせりる見ゆるも京都一と境を
の地もあまゝんを別をな行由に開する
とまよゝる利害の物もこのまを
うらむるもあまゝんを急ぎ
とどろくとの地もあまゝんを急ぎ

上中

三十万田

高子

三十二万田

不務

田林

名を急

十三万田

高子

十和田

不務

ン 八十五万田

よとあはれまをうつと七七十年田の倍
金を拂ふすの出来

法も大んを百葉のむらゝの不務を
捕して下村家も十あるも世も印と
しと其の基を造るもこのまを急ぎ
の不務をのむるもこのまを急ぎ

御所(は)は地とて家名とてつとるは
七のさしをいふも引きとるはあとの
不動をぬ換ふ来しとて印し株券
やと換へし利益の果を海とてお
とさすの(運)換のつとるは(運)換
の不動を今に換ふは海とて
と六七十あるも満つとて、借るは
おとせむ村家と維持すること、出来
しうとせやと、儲けつとるは、
土地の収益と公租を拂ふも、
い子とて、とて、
東林堂

生る。利息を、
え年利の、
一年の、
一刻を、
い、
お、
ま、
家、
用、
と、

とすしと金の条金や金の地金を
たすし埋金にすし位あるとさう
とすきさうさうさうさうさうさう
とすくは木、すし位あるとさうさう
の条、さうさう改革のゆゑさうさう
校すし、すし金の地金をすし校す
えさうさうさうさうさうさう、校す
の、さうさうさうさうさうさうさう
校すさうさうさうさうさうさうさう
唯比三すし、校すさうさうさうさう
の、さうさう校すさうさうさうさう

源
徳
興
堂

金の条金を保つてさうさうさう
とすし校すさうさうさうさうさう
人の貴重さうさうさうさうさう
由、校すさうさうさうさうさう
このゆゑ校すさうさうさうさう
さうさう校すさうさうさう

の漢村さうさうアウレバラ、さうさう
さうさう校すさうさうさうさう
つと先が金さうさうさうさうさう
さうさう三寸三分四方位の大さうさう
さうさう細さうさう校すさうさう

吾んとして終るゆ折て此人お申の既歴と
るまゝこの料地を分の親方として
る構へきまの、治平んうまをと流し
申す染ん初断るも毎朝自ら魚
所考の不出法して魚を買ふの折回を
るしてても七度ちかひ、後ん三日の安を
るてもも口中一停て二三日の安を
ゆして休懸てゝゝゝお方々を
領のる構へておしゝ書をかゝるゆ
くおと領の維持に華園てゝゝ
り冷熱をんてゝゝ此のの舟折るよ

こや論を談ひて作し木橋とせり
の人の喜氣の壯を見る
○小中井法矩の子おを高くし
ゝゝのあゝと撫てゝゝ中入井上毅の
前々漢文の帛文の子おありし三枚
と流る長く命てゝゝお守りてまき
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○往來其蹟輪道は難し金傳
寺殿四道と危うとゝゝゝ代草也

〇やぶおるの園に懐糸一箱とる

よー野山

こまの

いあうり

まにまに

また

えぬい

とや

いほぬあ

低うの代々もあまきさのふあもあまきさ

たせしの鑑定れもあまきさのふあもあまきさ

思ふういほあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

あまきさのふあもあまきさのふあもあまきさ

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東林園表

以下全て
白紙

